フランシス・レドヴィッジ

『我がアイルランド』より
ロード・ダンセイニ

嘗て私がサハラを旅した折、アラブ人から星の名前とその由来について話しを聴く機会があった。我々のささやかな野営地から彼等は地平線に間近い星を指さした。その星はすぐに消えてしまうという。私はその星の物語を焚き火の側で聴いた。しかしそれをここで紹介することはしない。それはこれから述べる物語の趣旨とは異なるからだ。しかし私は砂漠を照らすその短命の明るい星の光を今でも想い出す。私はレドビッジのことを考えている。そして同じサハラの旅で荒地から鳥たちが飛び立つ時の鳴き声も耳にした。彼らの進む旅路の先には何百マイルも樹木の姿はないのだ。私は何の前触れもなく響き渡ったその鳴き声のことを忘れることはない。鳥たちは北の空へ急いで飛び去り、周囲は再び沈黙に包まれた。すべての美しいものは突然に到来し、短い命を終える。私はレドヴィッジのことを考えているのだ。

一九一二年の夏私はレドヴィッジから一通の手紙と詩が綴られた複写本を受け取った。彼は私に意見を求めていた。その作品は未熟なものであり、そこからは彼がいかに若いかが感じ取れた。しかし常套句はあるもののそのしっかりした文章はアイルランドの田園を透徹した感性で描き出していた。それはまるでめずらしい花々と雑草で編んだ花束を差し出す熱心な少年のような行為であったのだ。そして若き詩人に与えるべき指導などは存在しない。（人は助言によって詩人になることはありえない）私が彼に与えられる助言といえば慣用句を使わないという一点であり、彼はそれを即座に実行したのである。この詩人が忘却の河レテを渡らせずにおいたささやかな韻文集に目を通すと、少なくとも一箇所以上先達詩人を真似た表現が存在する。しかしそれは彼がみずから表現する能力がないとかビジョンが欠落しているという理由からではない。唯それがそこにあっただけの事情なのである。多分彼は薦めかねる書物も読んだ筈である。その結果は前述の通りの雑草の如きものとなったのである。この詩人にとって次のような美しいメタファーを編み出すことなど容易いことなのだ。

The Large moon rose up queenly as a flower
Charmed by some indian pipes

大きな月が女王のように昇る
銀竜草に呪文をかけられた花のように

彼は銀竜草について「突風に頭を垂れる」という表現を使おうとしていた。しかし私は選択として今のままの表現を薦めたのである。彼はそれに従いこのような一節となったのだ。彼の

草原に関しての卓越した観察力は驚愕に値する。私は次の一節を読んだ時の驚きを忘れることはない。

When briars make semi-circle on the way
道行きの野バラが半円を描く

私は生涯を通して野バラのことをよく知る人間の一人である。そして小径の側に咲く野バラの蔓がカーブを描く光景には馴染みがある。しかしその蔓が半円を描くという文章を読んだことも、そのような話しを聞いたこともなかった。しかしレドヴィッジのこの文章を読んだ時、私はそのことにすぐに思い当たったのだ。そして私より鋭敏な観察力を持った人間が野バラ見つめていることに気付いたのである。そしてそのような発見はレドヴィッジの詩を読めば幾度となく経験することなのだ。初期の作品の中で私を最も感動させたのは次の一節である。

And wondrous impudently sweet,
Half of him passion, half conceit,
The blackbird calls adown the street

素晴らしくも厚かましく甘味なるもの
半ば情熱から、そして自負心から
クロウタドリが通りの人々に呼びかける

クロウタドリについてこれ以上に真実であり心楽しませる表現に出逢ったことはない。それは彼みずからが春の詩人として描いたすべての詩句にも言えることなのである。

And in his song you hear the river's rhyme
And the first bleat of the lamb.

その唄からは小川の韻の響きや
生まれたばかりの子羊の鳴き声が聞こえてくる

私はレドヴィッジに真の詩人である旨の手紙を書き送った。彼からはそのことを大変感謝しており、それを忘れることはないという返事を受け取った。しかし雲雀が雲雀であることを自覚することに関しては、我々に何の恩義もない筈である。彼が自然を見る目、そして自然に対しての深い感受性、そしてそれを書物に書き残す能力は彼の処女作に収められた「鳥籠のムネワカヒワへ」という作品で測り知ることが出来る。

To a Linnet in a Cage

When Spring is in the fields that stained your wing,
And the blue distance is alive with song,
And finny quiets of the gabbling spring
Rock lilies red and long,
At dewy daybreak, I will set you free
In ferny turnings of the woodbine lane,
Where faint-voiced echoes leave and cross in glee
The hilly swollen plain.

春が野にやって来て君の翼を染める
そして唄で広大な緑の平野が生まれる
鳥の鳴き声のざわめきに襞のような沈黙が寄り添う
赤く背の高い岩百合よ
露降る夜明けに貴方を自由にする
シダに覆われたスイカズラの小径の曲がり角では
歓びに震えた微かな声が響きあう
平原は丘のようにふくれあがる

それに続く詩句も愛らしい一節である。

You want the wide air of the moody noon.
And the slanting evening showers.

君はむら気な昼の広大な空間と
横なぐりに降る夕立がお望みだ

まったく彼の詩句は愛らしい文章に満ち溢れている。田園の愛好者なら彼の作品の頁を開く度に、花々に満ち溢れた陽光降り注ぐ牧草地の記憶が数多く留められていることが解るであろう。それはまるで花々自身が過ぎゆく季節の記憶を残すために本の頁に自らを閉じこめたかの如くの鮮明な記憶なのである。ここに処女作からもうひとつ春の訪れを詠った言葉を紹介しよう。

The Golden News the Skylark waketh
雲雀を目覚めさせる至上の知らせ

この詩が綴られた手紙を受け取った時私はロンドンにいた。しかし私はすぐにアイルランドに旅立ちレドヴィッジと出逢ったのである。彼はスレーンからやって来た。その木立に満ちた

丘はボインよりも高地にありタラの地から見通すことが出来る。その周囲にはモールネ山や北西ミース地帯の丘がキャバン方向に薄く緑に霞んで見える。スレーンはそれらの山々より近い場所にあるのだ。彼は明らかにアイルランド民族の血を持った人間であり、その地に住む人々の特徴を備えている。それらは私にとって身近な筈であるが、それがどの種族であるかかを特定することは出来ないのだ。ひとつだけ私が見知る人々と彼が異なる点がある。それは彼の目なのだ。詩人というものはおおよそ美しい目を持っている。しかし彼のようにより多くの夢を呼び込む瞳を持った人間と出逢ったことはない。私は彼にキーツの詩集を手渡した。そしてその瞬間に彼の詩が進化したことが解った。近くで鳴る鐘の音にあわせて微かに共鳴し始めたもうひとつの響きを感じ取ったからだ。いずれにせよ彼は他人の模倣などするような人間ではない。しかし彼の魂はキーツの魂と出逢うことによって強められたと考えられるのだ。彼を頑固者と呼ぶのは正しい表現であろう。彼は花を求める蝶のような仕事を探し求めてきた。そして彼はそれを続けることに固執し続けたのである。私は彼のように些細な物事に感謝する人間に出逢ったことはない。その感謝の念は私の慈悲心にはないものであり、それは彼自身がみずからの魂に対して持っている親密さから生まれるものなのである。彼の作品を読む人間は誰もその感謝の念が文章から湧き上がっていることを感ずる筈だ。彼は実生活では自分の母親を深く敬っていた。そして芸術においてはクロウタドリの歌に深い愛情を捧げたのである。私は彼の作品から撰集を編み、それを現在までスポンサーを続けてくれている出版社メッサーズ・ハーバート・ジェンキンズ社に持ち込んだ。当時の編集長はジェンキンズ氏本人であったが、彼は仕事上の間違いを犯した。それは今でも訂正を希望したい一件である。彼はレドヴィッジを乞食詩人として遍く宣伝したのである。もはやこの世にいない人間の過ちを正すことは気が進まぬ。しかしレドヴィッジも逝ってしまった今、彼の名誉にかけてこの詩人が乞食などではなかったことを明言しておかなければならない。彼は確かにミース州の市営道路の作業員の仕事をしていた。しかし道路工事人は乞食ではない。それどころか彼は現場の職長であったのだ。メッサーズ・ハーバート・ジェンキンズ社は現在までレドヴィッジを乞食詩人としたこと、あるいはその他の誤った記述に関しては何の訂正も行ってはいない。

処女出版の作品集に次のような詩作がある。

"Desire In Spring"

I love the cradle song the mother sing
In lovely places when twilight drops
The slow endearing melodies that bring
Sleep to the weeping lids; and when she stops,
I love the roadside birds the tops
Of dusty hedge in a world of Spring

And when the sunny rain drips from the edge
Of midday wind, an meadows lean on one way,

And a long whisper passes thro' the sedge,
Beside the broken water let me stay,
While silent changes colour up the hedge.

春の憧れ

母の歌う子守歌が愛おしい
薄暮の頃素敵な場所で聴いたあの子守歌
そのゆるやかで愛らしい響きは
涙にくれる瞼を眠りに誘う
その歌が止む時
春の季節に埃が積もる
道端にある生け垣の小鳥達に心奪われる

真昼の風が吹く先で
陽光を浴びて雨粒が滴り
草々は皆同じ方角になびく
スゲの叢樹の方から小川のせせらぎが聞こえる
白い水面の傍らに佇んでいたい
想い出の中の懐かしい光景に浸る時
静かな変化が生け垣を染め上げていく

彼は強烈な素朴さを持ち合わせている。しかし私達はそのこと自体を過大評価するべきではない。深い草叢を吹く風は皆が感ずるものであるが、誰もその事実をこの詩人が「草々は皆同じ方角になびく」と詠ったように鮮やかには表現しないのである。彼は無論草原や木々や花々、鳥や羊たちのことを熟知していた。しかし彼は自分自身も含めた人の心のことが解っていたのである。そして彼は雲雀やムネアカヒワと一緒に時を過ごす間に心に浮かぶ空想に慣れ親しんでいったのだ。彼の詩を読めばいたる所にアイルランド民族の魂に寄り添う二つのことへの手がかりを見出す筈である。そのひとつはこの民族が恒に拠り所とする古（いにしえ）の伝説であり、もうひとつは人々が滅多に口にすることがない、あの忘れ難き妖精と様々な精霊の存在のことなのだ。その事情についてレドヴィッジはボインの地で囀る小鳥達と同様に精通していた筈である。私は今ラナウン・シー(*1)がどのような暮らし向きなのかを知る由もない。それらの精霊達は今は政治に毒されているかも知れない。嘗ては気楽に徘徊していたアスロンやドロイトウィッチの地は今ではジャズの響きに満ち溢れている。彼等は忍び寄る現実を押し戻すことが出来ないでいるのだ。しかしレドヴィッジの書く詩に惹かれて時に彼等は嘗て一緒であった人々のすぐ近くに蘇る。人々は今まで次のような奇妙な一節には出逢ったことがない筈である。

Every night at Currabwee

Little men with leather hats
Mend the boots of faery

キュールラブウィーでは毎晩
革の帽子を被った小人達が
妖精の靴を修繕している

そしてそのような修繕の様子に興味を持つ諸氏は次のような一節も歓ばれる筈である。

Louder than a criket's wing
All night long their hammers' glee
Times the merry songs they sing

コオロギの鳴き声よりも高らかに
やつらは一晩中歓びの鎚音を響かせる
昔も今も陽気な歌を口ずさみながら

レドヴィッジの詩の此処彼処で感ぜられる煌めきは民話の輝ける宝庫から引き出されたものである。しかし私の作品には同様なものは存在しない。私はそれを垣間見たに過ぎず、そのヒントを手に入れただけなのである。しかしレドヴィッジはその宝物を多分近隣の人々すべてと共有していたのだ。彼の処女作はその殆どが次の二つのことによって触発されて詠まれた牧歌集である。そのひとつはボイン周囲に広がる草原など田園の美しさである。田園は南からその地に向かって北に旅をし、そこで進路を東に変える。その様子はタラの丘から眺めることが出来る。彼の牧歌を生み出したもうひとつの要素は嘗てタラの地で生きていた人々の英雄伝説である。この作品はこの二点にのみ触発されて書かれたものであると言える。その田園牧歌の中には時として彼が読んだ過去の詩人の影響も顔を覗かせる。私が撰集に選ぶべきではなかった作品のひとつは確かにウォルター・デ・ラ・メアの作品「来訪者」(*2)の影響を受けて書かれたものだ。若い詩人は皆その詩に影響を受けるのである。そしてその後少しの時間が過ぎた。世界の状況は悪化していったが、その間レドヴィッジの芸術は非常に強められていた。彼は愛国心に燃え、キチェナー卿呼びかけの最初の志願兵に名を連ねたのだ。彼はアイルランド軍の王室インニスキリング隊に入隊するが、それ以前にキーツの作品を読んだようである。彼はその詩人からアルテミスという神の名や他の女神のことを学んだのであろう。そして彼は「アルテミスの夢」という作品を編んだ。その詩は古典的な暗喩に溢れているが、霊感は依然ミースの草原から訪れていた。薔薇はいかにオリンポスの風に後押しされようと、その蔦はギリシャの神殿の円柱を這い登ることはなかったのである。この作品は大変素晴らしい描写に満ちた若者と女神の狩りの物語である。そこから長文を引用することとする。

The white Nine left the spaces of flowers,and now
Went calling thro' the wood the hunter's call.

Young echoes sleeping in the hollow bough
Took up the shouts and handed them to all
Their sisters of the crag, 'till all the day
Was filled with voices loud and musical.
I followed them across a tangled way
'Till the red deer broke out and took the brow
Of a wide hill in bounce like a ball.
Beside swift Artemis I joined the chase;
we roused up kine and scattered fleecy flock;
Crossed at a mill a swift and bubbly race;
Scaled in a wood in a wood of pin the knotty rocks;
Past a grey vision if a valley town;
Past swains at labour in their couloured frocks;
Once saw a boar upon a windy down;
once heard a cradle in a lonely place,
And saw the red flash of a frightened fox.

We passed a garden where three maids in blue
Were talking of a queen a longtime dead.
We caught a green glimpse of the sea:then thro'
A town all hills;now round a wood we sped
And killed our quarry in his native lair.
Then Artemis spun round to me and said,
"whence come you?" and I took her long damp hair
And made a ball of it, and said, "Where you
Are midnight's dream of love."

白い九女神が花園を離れ
森の中をこれから狩りが始まることを告げて廻った
木の枝の窪みで微睡んでいた若き木霊たちは
叫び声を発しそれを岩の窪地にいる姉妹達に伝えて廻った
そして一日中空気は壮大で音楽のような響きに包まれた
私は入り組んだ道を進みながら女神達を追った
赤鹿が現れ広大な丘の頂上に向かっていった
鹿はボールのように飛び跳ねて逃げていく
私も俊敏なアルテミスの横で追跡に加わった
水車小屋を過ぎたところでアマツバメと陽気な人々に出逢った
松の木の森でこぶだらけの岩を登った
灰色の美しい光景が見えた。谷間の街かも知れない

色つきの仕事着を着た若者達の側を通り過ぎた
風下の方に猪の姿も見えた
寂しげな場所から子守歌が聞こえてきた
驚きに震える狐が赤く目を光らせた

私達は死して久しい王女の話しをする
青い服を着た三人の乙女のいる庭園を過ぎた
一瞬緑に輝く海が目に入った
そして街とすべての丘を越え
私達はある森にたどり着いた
そして巣の中で獲物を射止めたのだ
アルテミスは私の周りをくるくると舞いながらこう話しかけてきた
「あなたはどこから来たの」私は彼女の汗に湿った髪をかき上げ
それを丸めながらこう言った
「あなたが真夜中の愛の夢であった場所からです」

以降死すべき者の不死の者への愛の様子が語られる。そして夕暮れ時の愛の情景が次のように詠われるのだ。

The trees were all at peace,
And lifting slowly on the grey evetide
A large and lovely star

木々は皆静寂につつまれている
灰色に暮れなずむ空にゆっくりと
大きく愛らしい星が昇る

そして次に自ら身の上ことが語られる愛らしき文章が続くのだ。

I have not loved on earth the strife for gold,
Nor the great name that makes immortal man,
But all the struggle upward to behold
What still is left of Beauty undisgraced,
The snowdrop at the heel of the winter cold
And shivering, and the wayward cuckoo chased
By lingering March, and in the thunder's van
The poor lambs merry on the meagre wold,
By-ways and cast-off things that lie therein,
Old boots that trod the highway of the world,

The scoolboy's broken hoop, the battered bin
That heard the ragman's story, blackened places
Where gipsies camped and circuses made din,
Fast water and melancholy traces
Of sea tides.

私は地上の金銭闘争などに興味はありません
不死の者になるための名声を欲したこともない
私は高みに昇り未だに高貴な美を留めているものを
見つめることを愛してきました
それは寒い冬に舞い降りる雪の雫
震えながらむら気な郭公を追いかけること
なかなか過ぎ去らない三月　雷鳴が轟く中
草木の枯れた高原で痩せ細った羊たちが戯れる様子
小径とそこにうち捨てられた品々
世界の大通りを歩き回った古い長靴
壊れてしまった子供用の廻し輪
屑屋の身の上話しを聴いてきたでこぼこの塵缶
ジプシーが天幕を張り、サーカス小屋の喧噪が聞こえる場末
波しぶきと物憂げな波の跡

レドビッジが如何に他者から霊感を借り受け、ギリシャのことを描こうとしたところで、ミースのことや彼が暮らしていた土地のことを知っている私にとっては、その狩りの様子を目に浮かべることが出来るのだ。「鹿が丘の彼方にボールのように跳ねていく」という強烈で鮮明な描写はスレーンの「鹿公園」の情景である筈だ。そして一行はボインを過ぎて先に向かったのであろう。「死して久しい王女の話しをする」人々の話もアイルランドと無縁ではない。前にも述べたと思うが人々の記憶というものは次第に伝説へと回帰するのである。それはタラの地からスリーブ・ブルームス（*3）が遠方に霞んで見えるようなものである。この詩は次の驚くべき二行で終わりを告げている。

Oh,Artemis--what grief the silence brings!
I hear the rolling chariot of Mars!

アルテミスよ　汝は静寂のうちに如何なる哀しみをもたらすのか
マルス神の二輪戦車が近づく音が聞こえる

その後彼は王室インニスキリング隊第五師団に入隊しリッチモンド兵舎にやって来た。当時彼は戦争に向かう兵士として非常に純粋な夢想を抱いていたようである。彼は雅やかで美しい

詩を編んだ。それは「少年の朝」(*4)という作品でありここでは全編を紹介する。私はその少年が誰であるのかを知らな。しかしそれはすでに世を去ってしまった彼の弟であろうと思われる

He will not come,and still I wait.
He whistles at another gate
Where angels listen. Ah,I know
He will not come, yet if I go
How shall I know he did not pass
Barefooted in the flowery grass?

The moon leans on one silver horn
Above the silhouettes of morn,
And from their nest sills finches whistle
Or stopping pluck the downy thistle.
How is the morn so gay and fair
Without his whistling in its air?

The world is calling, I must go.
How shall I know he did not pass
Barefooted in the shining grass?

奴は来ないで僕は待ちぼうけ
奴は別の門のところで口笛を吹く
それを天使が聞いている　解っているよ
奴は来ない　でも僕が行ったら
奴が花咲く草原を裸足のまま
通り過ぎるかは解らないけれど

三日月が銀のシルエットに輝いている
巣の入り口で小鳥が囀っている
そして急降下で綿毛の生えた
アザミの花を摘みにいく
夜明けは小鳥の囀りがなければ
楽しくも美しくもない
お呼びがかかった　行かなければ

奴が光輝く草原で裸足のまま
逝ってしまったかどうかは解らないけれど

レドヴィッジはガリポリとギリシャ、そしてフランスで戦った。その間も彼は詩を書き続け、故郷の鮮明な記憶を語り続けた。その行為は戦争によって妨げられることはなかったように感ぜられるのだ。彼はギリシャで家路に戻る羊のことを「鐘の音ひとつで小川を飛び越える」と表現した。これは彼の芸術の典型であり単純明快に表現する素朴さそのものなのである。そしてこのような表現は未だに誰も試みたことはないのだ。そしてこの表現は極めて真実を突いている。羊のジャンプについて言えば、鐘は跳躍の反動で首元に押しつけられ、小川の向こうに着地するまで鐘の音は響かないのだ。レドヴィッジは無論そのようなことを考えた訳ではない。彼は印象として唯それ感じただけなのだ。そして「その印象は彼の多感なる魂に鮮明に刻まれることとなり、そこから読者はその単純な出来事が起こった記録を手にするのである。次の詩はフランスで描かれたものであり、それも死の間際に編まれた作品である。そこからは彼が恒にアイルランドの空気を完璧に身に纏い、それを持ち歩いていたことが伺える。

Home

A burst of sudden wings at dawn
Faint voices on a dreamy noon,
Evening of mist and murmurings,
And nights with rainbows of the moon.
And through these a wood-way dim,
And waters dim, and slow sheep seen
On uphill paths that wind away
Through summer sounds and harvest green.
This is a song a robin sang
This morning on a broke tree,
It was about the little fields
That call across the world to me.

故郷

夜明けの突然の羽音
夢見の真昼の呟き
夕暮れの霧とざわめき
月に虹がかかる夜
森の小径が霞んで見える

遠くに海が霞む　羊の群れがゆっくりと
丘の上の小径を風に吹かれて歩んでいく
夏の季節のざわめきと収穫の緑
今朝コマドリは裂けた木の小枝で
そんな歌を唄ってくれた
それは世界を超えて私を手招きする
ささやかな野辺の話し

この詩が世界大戦の戦場で編まれたことが唯ひとつの言葉から分かる。コマドリは裂けた木の小枝で歌を唄っている。そしてその一言がなければこれはのどかな田園の牧歌となるのだ。彼の最後の詩(*5)は次のような文章で始まる。

Powdered and perfumed the full bee
winged heavily across the clover,
And where the hills were dim with dew,
Purple and blue the west leaned over.

花粉にまみれ芳しい香りを放ちながら
荷物満載の蜜蜂は力いっぱい
クローバーの花園で羽ばたく
紫と青色に霞む丘は朝露に濡れ
西の彼方から迫り来る

私がこの一節を紹介したのは、彼の芸術の強さがどこからやってくるのかを示すためである。以降この詩では彼の愛する少女が登場する。彼女は一九一五年の夏にこの世を去るのだ。そしてこの詩人も自分の死期が近いことを自覚する。

I tiptoed gently up and stooped
Above her looped and shining tresses,
And asked her of her kin and name,
And why she came from fairy places.

She told me of a sunny coast
Beyond the most adventurous sailor,

僕はつま先立ちして
少女の輝く巻き毛を見下ろした
そして彼女の名前や一族のこと

それになぜ妖精の国から
ここにやって来たのかを尋ねた

彼女は僕に屈強な海の冒険者も辿り着かぬ
光り輝く海岸のことを話してくれた

以降この詩は不可思議で愛らしい国の様子を語る。しかしそれはアイルランド人の想像力を持ってすれば不可視のものではなく、そう奇妙な世界ではないのである。一節ではその国はこのように語られている。

Nor Autumn with her brown line marks
The time of larks, the length of roses,
But song-time there is over never
Nor flower-time ever, ever closes.

秋はその栗色の境界線で
雲雀の時間や薔薇の季節を
追いやることはない
歌の季節が永遠に続き
花々の季節も終わることはない

そして愛らしい一節が続く.

And by the lakes the skies are white,
(Oh,the delight!) when swans are coing.

白く輝く空の下　湖の辺に
（ああ、この歓喜よ！）白鳥が飛来する時

詩集の最後の頁でも彼は詩人の目で自然を眺めているのだ。

Like a poor widow whose late grief
seeks for relief in lonely byways,
The moon, companionless and dim,
Took her dull rim through starless highways.

寂しい寡婦が心に秘める悲しみを
癒すために人気なき小径を歩む

夜空に浮かぶ孤独な月も
薄雲越に星なき道を歩んでいく

そして最後の頁の下方で少女のことが語られる。彼女は詩人のもとを訪れた精霊なのである。彼は次のように書き綴っている。

From hill to hill, from land to land
Her lovely hand is beckoning for me.
I followed on through dangerous zones,
Cross dead men's bones and oceans stormy.

丘から丘へ　国から国へ
少女の愛おしい手が私を呼び寄せる
私は危険な場所を過ぎ　彼女の後を追う
死者の骨を越え　荒れ狂う大洋を乗り越えて

これらの詩句の中には内なるリズムが存在することを読者は自ずと気付く筈である。それは鳴り止んだ鐘の中で未だに響いている深い響きであり、それに深く感銘を受けるのである。

還らざるものを嘆いても仕方がない。この詩人は若い時代に手に入れたささやかな収穫物を赴くままに美しい文章として書き綴り、その頁の数を増やしていった。そして数年が過ぎそれは偉大なる詩人を生むこととなったと私は考える。しかし世界はまだそのことに気付いてはいない。彼はやがて大いなる名声を手に入れることになるだろう。それはこの詩人みずからの預言の成就なのである。

At dawn a bird will waken me
Unto my place among the kings.

夜明けに一羽の小鳥が私を目覚めさせる
私は王族達の間で目を醒ます

訳注

(*1)ラナウン・シー　Lanaun Shee　アイルランドの悪霊、吸血鬼。

(*2)「訪問者」　Walter de la Mare "The Listeners"

(*3)スリーブ・ブルームス　Slieve Blooms
スリーブ・ブルームス山には起源四千五百年前のストーンエイジの遺跡がある。その後青銅器時代から十二世紀のノルマン人の到来、そしてそれ以降も宗教的、軍事的な要所であり続けた場所。

(*4)「少年の朝」　To a little Boy in the morning

(*5)彼の最後の詩　"The Lanawn Shee"